すべての班で原爆展開催　班が元気に！　京都

全20班で高校生の原爆の絵展を開催し、班から工夫が広がって、仲間づくりでも前進した京都・宇治支部。とりくみを紹介します。

京都・宇治支部事務局長　高坂恵子

２つのボードは各会場で使われた

絵手紙小組がつくったウェルカムボードが大好評

班の工夫を学び合って

戦後被爆80年の昨年、支部委員会で「全班で原爆の絵展をやろう」と決めました。一つの班での開催がしんどいところは合同でやることも提案しました。

さっそく、開班（ひらき）がオカリナ小組に合わせて原爆の絵展を開催。どうやったらいいのか他班から見学にきて、イメージをふくらませ、開催が次つぎ決まりました。

山びこ班と広野班の合同開催の際には、絵手紙小組が作った2つの看板・ウェルカムボードがよく目立って大好評。他の班でも使いました。（写真上）

展示だけでなく、戦争体験や、原水爆禁止世界大会に参加した若い会員の報告、歌や人形劇、折り紙、絵本、平和のDVDの上映など参加型の工夫もしました。チラシを新聞折り込みの他に学校前や地域の文化祭、スーパーで手配りするなど、知らせるとりくみにも力が入りました。

会員同士の交流が刺激に

班でとりくんだことで会場が近くなり、車いすや高齢の会員が「近くでやったからこれた」「なかなか会えない会員や他班の会員との交流が楽しかった」など、班活動の刺激になりました。

これまで班会が開けなかった紫ケ丘班で「何か班でしないと新婦人に誘うこともできひんし、班会の日を決めて毎月集まろう」と班長が提案したら、「そうやね」と毎月班会ができるようになりました。広野班は、「大勢で集まって交流できて楽しかった」と短歌小組を作って近所の人を誘い会員に迎えました。伊勢田班、北こわた班は情報紙に折り込んだチラシで会員を迎えました。自由ヶ丘班では原爆展のチラシで参加した人が読者に。その後、班会にきた人が会員にと、なかなか仲間が増えなかった班でも仲間を迎えています。

あゆみ班の原爆展

会員が減って班の存続が危うく、他班との合併も考えていたみずき芽班では、「班をなくしたくない」と読者に訴えると会員になってもらえ、班が存続できるようになりました。

班の1歩を大事に

班からの仲間づくりにつながったのは、原爆展を支部主催ではなく班でやったことで、班が元気になったからだと感じています。前年に「美と平和」の班会を全班でおこない、年に1回でも全班で班会を開けたことも力になりました。

支部は、この2年間、どの班も前大会より〝一つ大きな班に〟と、班で会員1人、読者1人を増やすこと、支部は20人20部を増やす目標を決め、大会目標を達成しました。高齢の会員の退会という悲しいこともありますが、楽しい小組や班会で大きく減らさず、手の届く目標にしたことは良かったと思います。給食費の無償化署名のとりくみで、次世代の会員が署名用紙の裏面のチラシを作ったり、記者会見など、年配会員が苦手なことを難なくやっています。

宇治支部は、会員の1割が次世代です。今年はその世代を中心に6月の支部フェスタに積極的に参加できるよう、班を超えてグループラインでつながりを広げ、やりたいことの相談を始めています。世代を超えてつながって、班がますます元気になるといいなと思っています。

主張

2月18日、特別国会が開会し、第2次高市政権が発足しました。総選挙の結果、衆議院で自民党が3分の2以上の議席を占め、国会の様相は一変しています。高市首相は選挙が終わったとたんに改憲を言い出し、スパイ防止法制定、殺傷兵器輸出の全面的な解禁、「国旗損壊罪」など、戦争国家づくりに前のめりです。

国民が最も望んでいるのは物価高対策です。総選挙のために2026年度予算案の審議は1カ月も遅れました。高市首相は年度内成立をめざし、審議時間を削ろうとしています。過去最大の9兆円超という軍事費突出の一方で、暮らしを守るには不十分な予算案を数の力で押し切るなど許されず、切実な声にこたえて審議を尽くすべきです。

連立を組む日本維新の会は高市政権の暴走の「アクセル役」を公言、多くの野党が明確な対決姿勢を示さないなか、市民の声を国会に突き付け、憲法を守る立場の政党や議員と共同を広げることがいっそう求められています。

特別国会開会　数の力の暴走許さない

選挙後、新婦人は各地で「憲法改悪許さない」「大軍拡反対」と署名やスタンディングに飛び出し、「戦争になりそうで心配」「暮らしはどうなるの」など、暮らしや平和への不安の声が寄せられ、入会も相次いでいます。19日の国会前の行動には、初参加も含め1000人が集いました。

新婦人は、次世代とともに「大軍拡をやめ、暮らし、社会保障、教育の予算拡充を」求める署名と切実な要求で国会議員に迫っていきます。戦争させない、改憲NO！と行動をつよめていきましょう。

聞き書き　母の歴史　3082

大分県　諫元正枝（いさもと）さんのお話　（11）

2003年2月27日の朝、私が県議会議員選挙2回目の挑戦のため街頭演説に出かけようとしていると、「これ（ベスト）が編み上がったので、ひ孫のところへ送ってくれ」と言って、母が私を送り出してくれました。

昼食時に帰宅した夫からの緊急連絡で、救急病院に駆けつけましたが、母はすでに息を引き取った後でした。病名は心筋梗塞でした。後で夫から聞いたところでは、その日、母はひ孫のために編み上げたピンクのベストを左手に、右手にはアイロンのプラグを持ったままうつ伏せに倒れていたとのこと。介護の手をまったく必要としなかった94歳の旅立ちでした。

木彫り親子展で母（左）と私（1980年）

母が残したもの

26歳で夫を亡くし、戦中、戦後を生き抜いてきた母。何もすることがないのが嫌いで、いつも手仕事で時間を有効に活用し、人を喜ばせて前向きに歩き続けた生き方でした。残された小さな手帳には、手編みベストを差し上げた人、72人の記録があり、配達の業者の方にも差し上げた晩年でした。

母の手仕事は、悲しい時も苦しい時も自らを励まし、絆を深め、手を取り合って、だれもが幸せになる平和な未来への伝言だったと思います。

今さらのように、要求を大切に文化を育む新婦人の小組活動は、人と人を結び、心を通わせていく、すばらしい方針だと思います。

つづく